

まいたさ



通常總會報告

平成29年
4月号 (No.658)

日川協加盟

巻頭言

自分本位といふこと

願法みつる

よしあしを人の上には言いながら
身をかえりみる人なかりけり (明治天皇)
人間界における自分本位どっぷりの現世の在り様を考
えて見るとき、なんとも心深く沁みる御歌ではある。
江戸期末までの大和心は、神道と儒教が混在した農耕
人間らしく、人間が「協力し合う人の間」でしか生きら
れないと知る人間関係の色濃いものであつたらう。そし
て文明開化の波は、渦中に在つた天皇の宸襟をも悩ませ
たようである。現代はまさにその波瀾の延長にあり、人
間関係も「比較競争する自分本位」になつてしまつた。
民族や国家の交流が普遍化している現代では、民族心
という概念も曖昧である。ともあれ、心ある人間の一人
ひとりとしては、自分の「分」を弁えて、交流融和の温
もりを浴びていたいものである。そうでなければ氷河期
を彷徨う動物になつてしまふ。

高齢化が進む社会では、老人が跋扈すれば国は滅ぶと
言われる。跋扈という概念解釈は難しい。しかし今や、
高齢人間が率先して自利よりも利他へ向かつて内省に心
を預ければ、世の中はもつと住みやすく、そして輝かし
いものになるだろう。とは想像できる。自分本位な一
老人が、今更の生意気を言うのもお笑いだが。

日日是好

願法みつる

虚と実の振り子止まれば闇の底
ボクの嘘アナタの嘘も壺の中
何程のご縁か犬と目が出合う
見下してみても高々背丈だけ
赤青は問わず地獄の鬼募集
仲違い過ぎて彷徨う狐の目
国のため死んでやるから金を呉れ
平等という屁理屈が嘘を生む
喝采の金のメダルにある若さ